

令和2年度 「年度末学校関係者評価」(外部評価)

	<p>項 目 (重点としたものに○)</p>	<p>学校の目標達成状況及び学校の取組の適切さ、改善方策について等の意見 (外部評価者からの指摘を基に記載)</p>
<p>教育環境の 充実</p>	<p>①学校安全の推進</p>	<p>①感染症対策が必要不可欠となり、苦労が多かったことと思う。教員が感染したときの対応、情報開示が素早かったが、この件に関する課題を検証すべきである。</p> <p>②スマートフォン所持の低年齢化が心配である。放課後、子どもが学校の敷地内で使用している姿も見られる。</p>
	<p>②教育情報化の推進</p>	<p>②携帯電話やスマートフォン所持の低年齢化に伴い、児童への情報モラル教育が必要とされている。コロナ禍の中、外部講師による授業は行えなかったが、児童の実態を踏まえ、発達段階に応じて、教員が自ら授業を実施できたことは良かった。</p> <p>②いろいろな方面でデジタル化が叫ばれている昨今、情報モラル教育や学習活動へのICT機器活用における学年発達段階に応じた指導の計画・実践の充実が大切だと考える。益々の積極的な取り組みを期待する。</p>
	<p>③地域との協働推進</p>	<p>③様々なイベントが中止になる中、PTA主催の「ペットボトルキャップ&ツリー」は、とても素晴らしかった。</p> <p>③感染症対策のため、田んぼ作りなど外部からの協力を得られず、地域の方々とのふれあいが減少したが、子どもたちは外部の我々にも挨拶してくれ、人との関りを大切にするという学校の姿勢が感じられた。</p>
	<p>④学校評価を生かした学校づくり</p>	<p>④4～6年生の児童アンケートの分析に、「自分の意見を相手に伝わるように工夫するようになり、それを実感できるようになったと思われる」とあるが、低学年でもその努力が伺われる。</p>
<p>I 学習指導の 充実</p>	<p>①授業改善の推進</p>	<p>①学習指導要領の趣旨を十分に生かした授業改善を進めることが肝要である。コロナ禍の中、授業研究会を研修の機会と捉え、児童一人ひとりを見据えた学習指導のあり方を、教員相互で研鑽を重ねることから、大きな成果が得られると考える。「主体的・対話的で深い学び」での授業改善の推進を、更に推し進めてほしい。</p> <p>①前年度までの委託研究Iの取り組みを振り返り、「主体</p>

	<p>②健康体力づくりの推進</p>	<p>的・対話的で深い学び」を実現するための基盤として、「学級集団の形成」に視点を置いたのは大切なことであり、良い取り組みである。</p> <p>①教員同士での授業参観や研究協議から、お互いに学び合う姿勢は、さらに大切にしていってほしい。</p> <p>②自粛期間中、運動する機会も減ったためか、自粛明け当初は転んだりぶらさがる時の腕力が低下していると感じたりし、子どもの体力の低下からけがにつながらないように留意していた。現在は、問題なく過ごしている。</p> <p>③中止された活動が多く残念だったが、6年生の校内ナイトウォークラリーや5年生のデイキャンプ、各学年のミニ運動会等、代替イベントを児童と教員が工夫を凝らして実施したことは、とても意義あるものだったと考える。</p> <p>③感染症対策のため、体験学習の分野で苦労があっただろうが、各学年、先生方の努力により、例年とは違う形で記憶に残るとしてお充実した時間が得られたようで良かった。子どもたちも大変なストレスもあっただろうが、放課後の子どもたちの表情は、とても豊かであった。</p> <p>④休校や感染症対策により、惜しくもできなかった活動を、今後どのように体験させ、習得させていくかは大人としての課題である。</p>
	<p>③体験活動の充実</p>	
	<p>④今日的課題への取組</p>	
<p>II 支援の充実</p>	<p>①支援環境の充実</p>	<p>①児童一人ひとりの実情に応じた適切な支援を進めることが大切である。指導方針、指導の方向性を共有、確認し、外部機関との十分な連携を図り、日常的な支援の充実を期待する。</p> <p>③いじめ問題については、小さなきっかけ、背景など、広く捉えなくてはならない。ふれあいスクールでは学校での指導を引き継ぎ、実際にトラブルが起きている場面で、具体的にこういうことがいじめに繋がるということを、子どもに伝えている。そのような時、子どもたちは聞く姿勢をもっており、いろいろな考え方。感じ方があることを知り、解決に向かう姿勢ももっていた。</p> <p>③問題行動をとったり、少し心配があったりする児童に関しては、毎月の情報交換会によりスムーズに課題が共有できて良かった。引き続き放課後の様子や情報等を、教育活動に利用していただきたい。</p> <p>③不登校や登校渋り、教室に入れない児童に対して、丁寧に支援の取り組みが行われていたことは素晴らしい。今後も、学校だけで抱えずに、外部機関や行政、福祉、地域等、多くの人の目で「困っている」児童ならびに家庭を見守っていけると良い。</p>
	<p>②安心できる居場所づくりと絆づくりの推進</p>	
	<p>③問題行動対策・不登校対策の推進</p>	

	④幼・保・小及び小・中の連携推進	<p>※放課後も、特別支援学級在籍児童がごく自然に楽しく友だちと遊んでいる。学校生活の中で、児童同士互いを認め合う良い関係が築けているからだろう。特別支援学級担任や教育相談コーディネーターとふれあいスクールとが、気軽に情報を共有できる場があり、大変ありがたい。放課後の児童の様子、気になる児童の言動等は、学校と共有し互いに生かし改善していけるよう努めたい。</p>
III 学校組織の 充実	①学校・学年・学級 経営の充実	①新年度のスタートが長く休校となり、学級づくりは大変だったと考える。休校中のおたよりや学習課題の発信、子ども様子の把握等、きめ細かく一生懸命に対応していたことは、評価されるべきである。
	②研究・研修の充実	<p>※コロナ禍の中で、今までの教育活動の一つ一つ見直したり、検討したりする必要があったことと考える。その中で、子どもたちを見据え、教職員が一丸となってより良い方向を見出すことができたことと思う。また、保護者や地域の皆さんの理解や共感を得る工夫も、大変だったのではないか。新学習指導要領の趣旨や、学校の変化について、十分な周知を図ることが大切になるであろう。</p>
	③信頼に基づいた指導の推進	<p>※夏季休業の短縮や感染症対策のための業務等、例年にはない対応で多忙な1年だったが、子どもたちは笑顔で楽しそうだった。教職員の苦勞の成果が見られた。</p>
	④働き方改革の推進	<p>※感染症対策が功を奏し、学校組織や学校行事の見直しが行え、教職員の学校運営への参画意識が高まったのは良かった。</p>